みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

収容、そして退去強制
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第13回)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 南, 真木人
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5114

少年院の隣にある法務省西日本入国管理センター（2001年、撮影：庄司博史）

変わるネパールと変わらぬネパール

――グローバル化した世界に暮らす――

第13回

収容、そして退去強制

3年ぶりに茨木市にある西日本入国管理センターに行ってきた。超過滞在で就労し、摘発・収容されたマガール人の友人に会うためだ。最近よく新聞をにぎわす同センターは、難民認定や在留特別許可を申請中の外国人や、国外退去を待つ人が収容されるところだ。清潔な所内と職員の慇懃な応対は相変わらずだが、変化もあった。些細だが大事なことでは面会・物品授与許可申出書に英語が併記された。また、収容者が外部に電話することが可能になり、所内の食堂から暖かい食べ物を低価格で差し入れ（出前）することもできるようになった。もっとも大部屋でそれを一人で食べるには、かなりの度胸がいることだろう。

面会した夫婦は、幸い収容16日目に帰国できることになり収容期間が短かったので、心身ともに健康そうだった。ガラス越しの30分の面会中、私たちはネパール語で会話し、立ち会う職員は沈黙を守る。壁には「隠語・暗号を使った会話は禁止」と掲示されているが、ネパール語は正しくも一言語と認められているわけだ。

友人によると、なかには居室以外に男女別のロビーがあり、収容者同士は決められた時間に自由に団欒できるらしい。共通語は日本語だ。彼の入所期間、そこには朝青龍のいとこもいたそうだ。新聞にも出たが、朝青龍の結婚式に招かれて来日し、残留して働いていて捕まった3人である。友人はマガール人もモンゴロイドで、モンゴルを起源とするから兄弟だと仲良くなったそうだ。それが縁で、いとこが職員から「釣りはないから航空運賃をちょうど払うように」といわれたとき、滞日13年で日本語が堪能な彼は「釣りを払うべきだ。それでは入管は泥棒のはじまりでしょう！」と抗議して、無事に釣銭が支払われたという。

職員が冗談のつもりでいったのか、あるいはそうして小銭を貯めているのかは知りえない。だがいずれにしろ、こうした職員の一言が、日本語があまりできない収容者に不信感を抱かせていることは間違いない。親日家の友人は「暴言を吐き、ドアを叩いて大騒ぎする収容者もいるので、職員が人を見て個別に対応するのは無理だろう」と理解を示す。とはいえ、せっかく日本贔屓になった外国人を出口で翻意させるのは得策でない。世界中で最後にこの国の味方になってくれるのは彼／女らなのであり、日本ファンを増やすことが「文化的安全保障」の第一歩だからだ。

写真・文◎国立民族学博物館助教授 **南 真木人**

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『〈都市的なるもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、『嗜好品の文化人類学』（講談社 2004年）、『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）など。